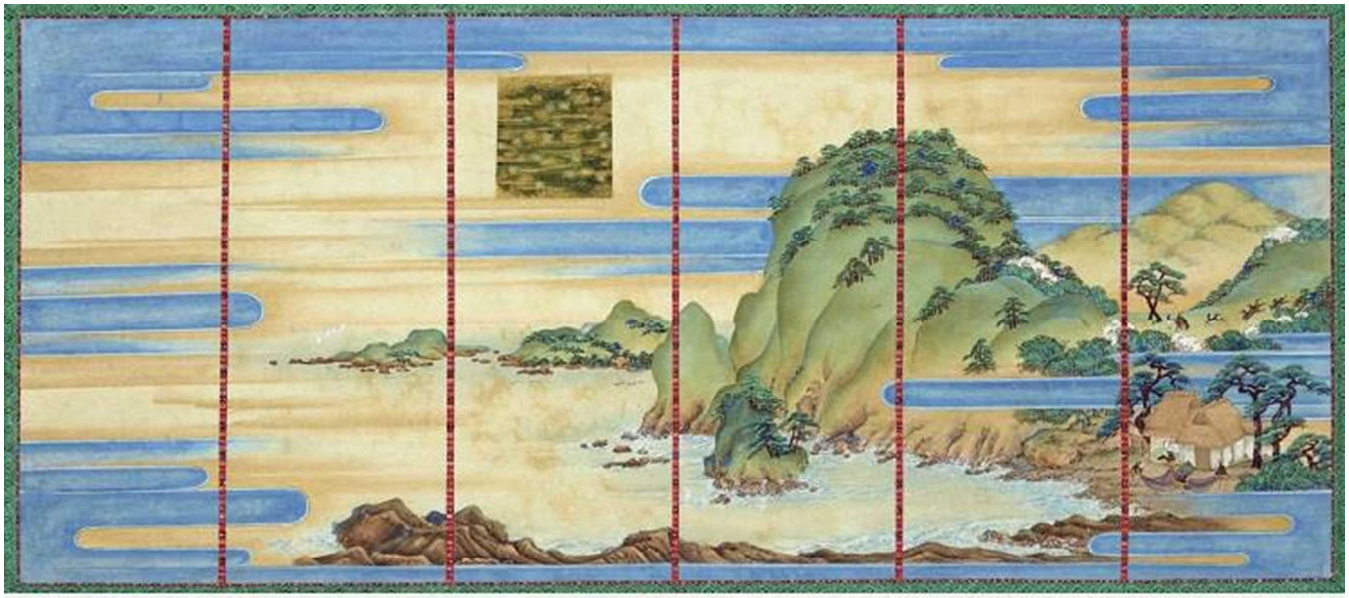
展示解説シート

鴨川市郷土資料館



「明治大嘗祭図 下 主基国」 複写　原本宮内庁宮内公文書館蔵

皇室ゆかりのモノと場所

～鴨川との軌跡～

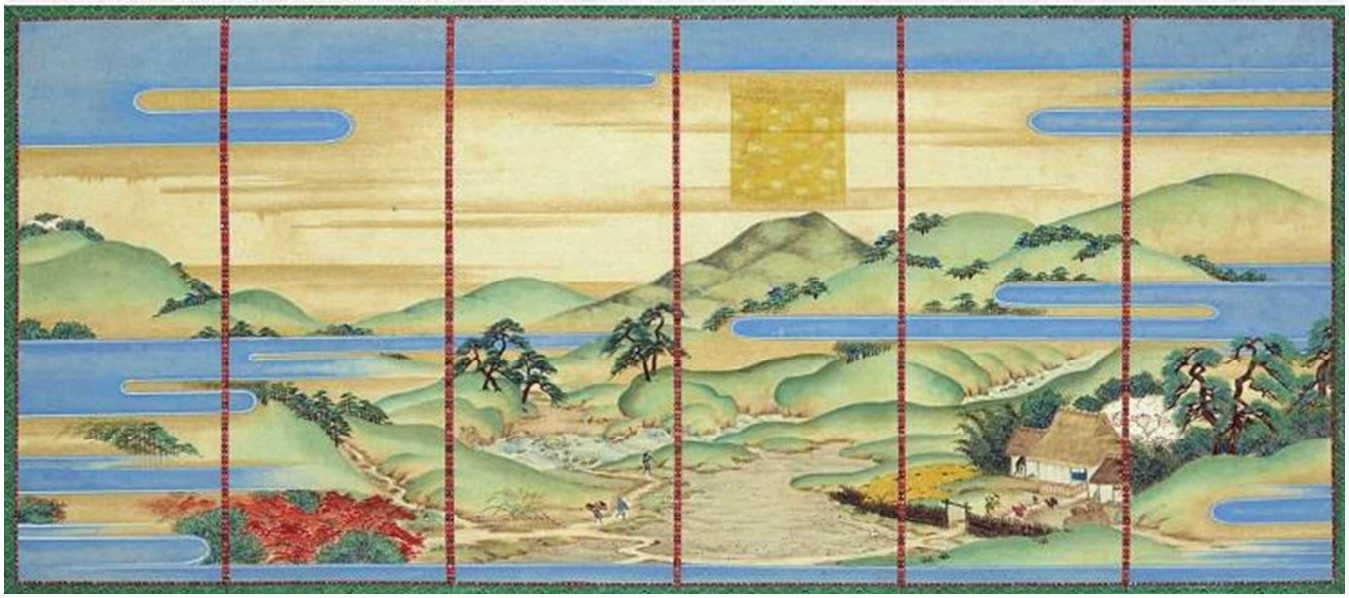
会場
郷土資料館
2階展示室

令和2年 2/8(土) → 4/12(日)

入館料●一般200円（140円）　小・中・高校生150円（100円）
小学生未満：無料　鴨川市民：無料
※（　）内は20人以上の団体料金
休館日●月曜日、2月12日・25日 ただし2月24日は開館

鴨川市郷土資料館
〒296-0001　鴨川市横渚1401-6
☎ 04-7093-3800

「明治大嘗祭図 下 主基国」 複写　原本宮内庁宮内公文書館蔵



【大嘗祭と主基斎田】

新穀などを供え、収穫祝いと今後の豊作を祈願する宮中の儀式に「新嘗祭」があります。

特に、即位後初めて行われる新嘗祭は、「大嘗祭」（古くは大嘗会）と呼ばれ、大嘗宮と呼ばれる祭殿を建設し、悠紀（ゆき）・主基（すき）の神殿にそれぞれ新穀などを供えて大々的に行われます。

大嘗祭で使用する米を作る田を「斎田」といい、「悠紀」「主基」の神殿用に、それぞれ、占いであるト定（ぼくじょう）により選定されます。

そのため、斎田は一代につき２カ所しか選ばれません。

明治４年（１８７１）に行われた明治天皇の大嘗祭では、悠紀斎田が甲斐国巨摩郡に、主基斎田は安房国長狭郡北小町村字仲ノ坪の６反歩（約６０アール）にト定されました。

北小町村では斎田の周囲には青竹を立てて、しめ縄を張り、垣をめぐらせて厳重に囲いました。隣地には八神殿、稲実殿などを設け、番屋で領主である花房藩の役人が警備しました。土地の埋立は「衣脱山（くぬぎやま）」の土を使い、材木は清澄の木を使ったと伝えられています。

大嘗祭に先立ち、神祇省から抜穂使（ぬきほのつかい）が訪れました。抜穂使の他、携わる人々で、社を建て、加茂川（北小町字柳久尾）の流れで、禊ぎが行われました。

翌日、収穫の儀式である「抜穂式」が厳かに行われました。田の所有者の他、村役人で刈り取りを羽織袴姿で行ないました。円座や鎌などが残されています。

明治大嘗祭に関する資料は、明治６年の皇城火災で失われており、現在宮内庁で保管する資料は関係者から集めたものとなっています。

斎田周辺の地名は、明治２２年に北小町村を含む５ヶ村の合併の際に大嘗祭にちなみ「由基（ゆき）村」とされ、大正４年（１９１５）に「主基村」と改称されました。

「主基」の名をなぜ最初から使用しなかったのかについては、明確な理由がなく、単に間違えたのではと言われていますが、主基小学校教師・安川文時は、主基の字を直接使うのは遠慮し、儀式で使用する「由の奉幣」の「由」と、主基の「基」を合わせた、と推察しています。

こういった経緯からか、明治天皇、昭憲皇太后のご遺品が、園祥子、本多子爵を通じ、当時の主基村に寄贈され、鴨川市が保管しています。

現在斎田跡地は、大正５年に記念碑が建立され、「主基斎田址公園」として整備されています。

また、毎年、鴨川市明治神宮崇敬講によって、主基斎田で収穫した新穀（稲穂の束）と、その米で造った白酒（しろき）が明治神宮に奉納されています。令和元年（２０１９）は、地元の早乙女によって御田植祭も行われました。

【明治大嘗祭　屏風絵風俗歌】

大嘗祭では、悠紀主基の両国からその国の名所の地名を書き出し、それによって屏風絵と風俗歌が作られていました。

明治の大嘗祭、主基からは、「長狭川」（加茂川）と「蓬島」（仁右衛門島）が選ばれています。

屏風絵には、左隻に仁右衛門島、雀島、八岡海岸と漁民、嶺岡牧の馬が、右隻には加茂川、長狭街道と北小町と思われる集落が描写されています。残念ながら、本体は確認されておらず、現在残っているのは宮内庁宮内公文書館が所蔵する模写です。

風俗歌は、次のとおりです。

岩間行く水のみとりも長狭川　いさよう瀬々の末深むらむ　　作者　神祇少輔　門脇重綾

名細しき蓬か島は君が代の　長狭県のかみや作りし　　作者　神祇大録　飯田年平

【御大典記念碑】

即位の礼・大嘗祭と一連の儀式を合わせ、「御大典」または「御大礼」と呼ばれます。

大正天皇、昭和天皇の御大典の際には、全国各地で、建物・道路の建設改修、神社の整備、植林・植樹、貯金など、様々な整備事業が行われました。と同時に、そういった事業の記念碑もしく記録のための石版も合わせて建てられています。

市内には、確認されるだけで１３の記念碑・石版があり、中には平成の際に建てられた記念碑もあります。

【誕生寺と皇室】

誕生寺と皇室が密接な関係を持つようになったのは、明治初めの頃といわれています。

大正天皇が幼い頃、病気がちだった時、勝浦市総野出身で、乳母の乳もみだった西川佐野代が法華宗の信者だったことから、誕生寺で病気平癒の祈願を行ったことが始まりです。誕生寺と関わりの深い水戸徳川家から妃を迎えた有栖川宮熾仁親王（ありすがわのみやたるひとしんのう）の命ともいわれています。その効験があきらかだったことから、女官方、有栖川宮の信仰を集めるようになります。

そのため、誕生寺には、皇室の方々の接待所としての客殿や、有栖川宮家の御霊屋である龍王殿の他、客殿には明治天皇御真影、祖師堂には有栖川宮熾仁親王の額や中山慶子や柳原愛子ら女官が寄進した仏具類など、由来のある建物、品々が数多くあります。

なお、客殿は、祖師堂から入って内部の拝観が可能です（有料）。

【清澄寺と菊・桐紋】

清澄寺の摩尼殿（本堂）や中門などの建物には菊の御紋が、摩尼殿正面の幕には五七の桐紋が掲げられています。

江戸時代末初め（１６世紀末）、徳川家康の帰依を受けた頼勢上人が清澄寺の住持となった際、京都にある醍醐寺三宝院の関東別院の扱いを受けました。醍醐三宝院は、格式の高い門跡寺院であり、菊の御紋と五七の桐紋を使用していたので、清澄寺も同様に使用が許可されたといわれています。

その他にも、清澄寺の宝物館には、日蓮聖人に関連した寺宝とともに、菊花御紋章付茶釜や後水尾天皇の綸旨など皇室との所縁の品々が展示されています。

なお、清澄寺宝物殿は、土日曜、祝日のみ、拝観できます（有料）

【元号の出典】

元号は、現在日本だけが使用しています。出典が明らかなものだけですが、儒学の経典「四書五経」や歴史書など、すべて漢籍（中国の書物）から引用しました。

令和では、初めて日本最古の歌集である万葉集から引用されました。

＜明治＞　『易経』　「聖人南面而聴天下、嚮明而治」

＜大正＞　『易経』　「大亨以正、天之道也」

＜昭和＞　『書経』　「百姓昭明、協和萬邦」

＜平成＞　『史記』　「内平外成」　／　『書経』　「地平天成」

＜令和＞　『万葉集』巻五　「初春の令月にして、気淑く風和ぐ」

【斎田選定は２択だった】

大嘗祭の斎田は、亀の甲羅を熱し、その割れ方で占う卜定により選定されます。しかしながら、当時の公式記録である「大嘗祭記」を確認すると、占いは「２択」だったことがわかります。

明治４年（１８７１）３月２５日に挙行が決定すると、４月２日には甲斐国（山梨県）と安房国（千葉県）に御用田検察のための役人が派遣されます。この時点で「国」は確定していたと想像できます。鴨川市内では、北小町の他、成川、大川面、宮山、仲、池田、太田学、京田、竹平、坂東が「選定されても差し支えない」旨の花房藩の回答に名を連ねています。長尾藩の領地であった北風原の田も候補になっていました。

５月２２日の卜定の際には、悠紀地方は「甲斐国巨摩郡山梨郡」、主基地方は「安房国長狭郡平群郡」とそれぞれ２択です。占いは「秘事」ですので、選ばれた理由は不明のままですが、事前にある程度の選別がされたことは間違いありません。

【異例の明治大嘗祭】

政権が江戸幕府から明治政府に代わり、まだ戊辰戦争の影響が残る中、明治の大嘗祭は執り行われました。古典を考証し、唐の模倣ではない「御一新」の時にふさわしい儀式をとの方針のもと、江戸時代の先例と大きく違うことが行われています。

①近畿地方以外で初

明治天皇の即位式は京都で行われましたが、その後、行われるはずの大嘗祭は、戊辰戦争中でもあり、延期されていました。そのため、江戸が東京に改められ、遷都されてからの挙行となりました。東京で行われたのは明治、平成、令和の３回のみです。

②主基と悠紀の方角が逆転

現在は、京都の以東以南に悠紀、以西以北に主基の斎田を選ぶことと正式に定められていますが、古くは、悠紀･主基の国郡は占いによって選ぶのが原則で特定されていませんでした。越前国（福井県）や伊勢国（三重県）が主基に選ばれることもありました。

しかし、平安中期以降、悠紀が近江国（滋賀県）、主基が丹波国（京都府）と備中国（岡山県）が交互に選ばれ、都から見て、東に悠紀、西に主基となっていました。

明治の時は、東に主基、西に悠紀と東西が逆転しています。そのため、鴨川市は、数少ない東の方角にある主基田であり、関東東北唯一の主基田となっています。

【鴨川から大嘗祭への献上】

①主基斎田として、新穀を献上

②明治大嘗祭に、長狭郡広場村外五十五か村より干鮑百斤（約 60 kg）を献上

③大正の大礼の際、「羽二重」の織物を製作・奉献するため、全国に「繭」の献納を求めました。安房郡からは１２４名、うち西条村２３名、東条村３５名、大山村２名が含まれています。

②大正の大礼の際、献上品は知事や郡長などの推薦を受けたものだけでした。安房郡からは、平群のバター、園芸物販売組合の促成故瓜の他、波太村（現・太海）の鰹節１貫目が献上されています。

③昭和の大嘗祭では、大嘗宮の庭積机代物（にわづみのつくえのしろもの）として吉尾村の永井家から「精粟」が献上。感謝状が残されています。

④令和大嘗祭では「鯖節」が「庭積の机代物」として献上。